

「円頓寺映画祭 2009」

上杉 俊輔^{※1}・小川 祐希^{※2}・島本 昌典^{※3}



映画祭ポスター



映画祭パンフレット表紙

1 映画祭概要

「円頓寺映画祭 2009」は「名古屋の映像文化の発展」と「商店街の活性化」という2つの目標のもと、メディアプロフェッショナルコース M1 の学生と名古屋大学映画研究会のメンバー合計約 30 人が中心となって、2009 年 4 月から発足したプロジェクトである。準備期間は約半年で、地元企業や国際言語文化研究科の協力のもと 50 万円の資金で運営された。この映画祭の特徴は、名古屋近郊の学生や若手クリエイター、一般市民の自主制作映画を広く公募し、集まった作品(約 200 作品)の全てを名古屋市西区の円頓寺商店街にて公開するという点であり、上映に使うスクリーンは商店街内の空き店舗、喫茶店などの飲食店、専門学校、空き店舗のシャッターなど合計 9カ所に設置した。映画祭当日の2日間で約 500 人の来場者が訪れ、普段は自主映画を観ない人々が興味本位で立ち止まったり、商店街に足を運ぶことの少ない若者が映画の合間に商店街内を散策するなどしていた。

※ 1 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士前期課程

※ 2 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士前期課程

※ 3 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士前期課程

2 商店街での開催の目的

2.1 商店街での映画祭開催—日常の中の映画祭

映画祭の目的である「名古屋の映像文化の発展」達成には、普段映画を観ない人にも映画に親しんでもらい、映画好きの裾野を広げることが大切であると考えた。映画館という形式張った場所ではなく、生活に密着した空間で映画祭を行うことで、気軽に映画を観ることができるだろう。そこで、商店街という日常の場面で映画祭を開催することとした。

2.2 円頓寺商店街選定の理由

数ある商店街の中で、円頓寺商店街は他の商店街にない魅力を持っている。それは、再開発されていないことによる「昭和っぽさ」である。何気なく掛かっている看板や、老舗の喫茶店など、よく残っていたと思えるものがあちこちに見られる。また、アーケードの下は歩行者専用の通りになっており、散策するのに適している。加えて、商店街のそばには「四間道」という、江戸時代の蔵や町屋など古い建造物の残る地域もある。円頓寺・四間道一帯は、名駅地区や栄地区という整然とした新しい街並みに挟まれた、「人間臭さ」の残るゆったりと時間の流れる場所であり、歩くほどにその魅力を発見できる。

以上の点をふまえ、私たちは円頓寺商店街を映画祭会場とすることとした。つまり、「昭和っぽい」雰囲気の良いさが若い世代には新鮮であること、散策する楽しみがあり、ゆっくりと歩き回りながら映画を楽しむことができるという点である。

2.3 商店街活性化

商店街で開催することで、本映画祭に「商店街の活性化」という新たな目的が加わった。円頓寺商店街は、一時は200人の芸者を抱え、名古屋の三大繁華街に数えられるほどのにぎわいをみせた。しかし、他地区の発展とともに客足は次第に遠のき、かつての面影はなくなってしまった。現在ではシャッターの閉まっている店舗もいくつか見られる。平日の通勤・帰宅時間になると、ビジネス街である丸の内に勤める人々が商店街を通り抜けるが、平日の昼間や日曜日となると、時間帯によっては全く人通りがないこともある。このような商店街で映画祭を行うため、商店街の活性化に少しでも貢献したいと、私たちは考えた。

3 準備期間

本映画祭の準備において、最も時間を費やしたのは、資金を確保するための協賛集め、開催地である円頓寺商店街および円頓寺本町商店街との交渉、作品募集と映画祭開催告知である。

3.1 協賛金交渉

協賛金集めは地元企業の広報担当者に掛け合い、学生活動と地域社会への貢献を軸に合計30社ほどに足を運んだが、なかなか理解が得られず苦労した。そのため、スクリーン、プロジェクターは、電子システム（メーカーと大学の仲介業者）と交渉し、デモ機を無償でレンタルすることで大幅に経費を削減した。最終的に中部電力株式会社、株式会社ミツカン、Hair Detail Motoyama の3社から協賛の協力をさせていただけることになった。この協賛交渉から学んだことは多く、中部電力広報部の立松様から言われた「君たちはおとなしすぎる、熱意があるなら、もっと前面に出して大人と交渉した方がいい。ビジネスの世界でも、最後に人を動かすのは熱意だから」という言葉は特に印象に残っている。

3.2 円頓寺商店街との交渉

商店街との交渉では、当初全く伝手のない状態だったため、なかなか思うようにこちらの意図が伝わらないこともあった。円頓寺商店街は伝統ある、古くからの人間関係で成り立っている町である。そのため新参者の学生は、商店街の方々と積極的にコミュニケーションをとって信頼関係をつくることが一番の近道であると考え、メンバー一同で何度も各店舗に通った。こうして会話を増やしていくうちに「若い人が商店街に入ってきて盛り上げてくれることは嬉しい」と言っていただき、毎月商店街との共同ミーティングを開くなど、運営にも大変多くの協力をしていただいた。映画祭前日の深夜、太陽堂さんがくれた差し入れのお雑煮の味を、大将の男気が香る、あのダシの味を、我々は一生忘れない。



商店街との打ち合わせ風景



円頓寺商店街

3.3 映画祭 PR 方法

作品募集と開催告知は主にポスター、ホームページ、ビラ配布によって行った。また、新聞社、ラジオ、テレビ局に幅広くプレスリリースをし、新聞は中日新聞、毎日新聞、読売新聞、名駅経済新聞に掲載され、東海ラジオ、東海テレビ、中京テレビ、NHKに出演するなど、マスメディアの注目度は高く、当日の来場者数と応募作品の増加に貢献した。

4 [コラム] 映画祭本番

いよいよ映画祭本番がやってきた。初日の11月27日(土)は、晴れ。11月の後半にしては寒さはそれほど厳しくなかった。午前10時の上映開始に向け、実行委員会のスタッフたちは、8時に商店街に集まった。上映場所に立て看板を設置したり、上映機材の最終チェックをしたり、半年以上準備してきたこの日のために皆余念が無かった。

そしていよいよ午前10時。各上映場所についた約20名のスタッフたちは、一斉に上映を開始した。円頓寺商店街一帯に映像が駆け抜けた瞬間である。映画祭では、営業中の店舗内3ヶ所(まつば、西あさひ、庵ひろ)、倉庫等の屋内上映場所3ヶ所(ふれあい館、水谷靴店、松露堂倉庫)、シャッター・壁面2ヶ所(サカエ堂、Family Mart前)の、合計8ヶ所で2日間にわたって、様々な映像が上映された。コーヒーや食事を楽しみながら、あるいは通りがかりにちょっと立ち止まって、という具合に訪れた人の数だけこの映画祭との関わり方があったと思われる。各上映場所では、その日の上映スケジュールと映画祭パンフレットを配布した。パンフレットには、映画の紹介や商店街店舗の紹介も掲載した。またパンフレットを持参した人に、いくつかのお店で割引が受けられるといった特典も用意した。映画祭のメイン会場であるビューティーアート専門学校では、招待作品2作品とコンペティション作品3作品の上映を行った。招待作品は柳明菜監督「きょうという日が最後なら」と、ジョン・ウィリアムス監督「いちばん美しい夏」である。実際にゲストとして映画祭に来ていただいた柳監督には、上映終了後に観客とのティーチ・インの機会を設けた。またジョン・ウィリアムス監督からは、映画祭用にメッセージDVDを送って頂き、こちらも本編上映後に上映を行った。コンペティション作品は、審査対象となった140作品のうちから3作品を選出して上映した。3作品とは、仲根唯世「ガラタクタッタ」、高橋昂也「レブン」及び林純平「忘れ物」である。この中から商店街の方々の投票により、高橋監督の「レブン」がグランプリを獲得した。3作品の上映終了後にグランプリ作品の発表を行った。また会場には、愛知県在住の仲根監督と林監督が駆けつけ、こちらも上映終了後に観客とのティーチ・インの時間を設けた。なおこのメイン会場でのイベントは、映画祭2日間のうち、初日の27日(土)のみ行った



メイン会場(ビーティーアート専門学校)



レストランシネマ(庵ひろ)

5 来年に向けての取り組み

来年の映画祭では、上映場所として屋外の壁やシャッターなどをより有効に使いたい。今回は、上映会場のほとんどは屋内であった。そのため、商店街を一見しただけでは映画祭が行われていることはわからなかった。そこで来年の映画祭では、映画祭を「やってる感」を出すために、屋外での上映を増やしたい。資金については、今回は協賛を企業1社(中部電力)と、国際言語文化研究科の先生方から頂いた。来年以降も継続して映画祭を行うためには、協賛企業を増やし、安定して資金を集められるようにする必要がある。そのために、例えば協賛企業提供の映画賞を設けるなど、工夫をしたい。作品集めについても課題が残った。今回は募集期間が短く、どれほどの応募があるかも予測できなかったため、集まった作品はすべて上映するという方針を採った。しかし、今回映画祭を開催したところ、数多く上映するよりも一つの作品をゆっくり鑑賞し、スタッフと観客、あるいは観客同士の交流が生まれることで、映画に親しみを持ちやすくなり、商店街の活性化にもつながることがわかった。また、予想以上の作品が集まり、そのクオリティもまちまちであった。以上の理由から、集まった作品は審査の上で上映作品を決定することが必要であると考えられる。

